

令和四年度

龍谷大学付属

平安中学校入学試験問題

受験番号

国語

解答上の注意

- 一. この問題用紙は「はじめ」の合図があるまで開いてはいけません。
- 二. 答えはすべて解答用紙の決められたところに書きなさい。
- 三. 解答用紙の決められたところに受験番号を書きなさい。氏名を書いてはいけません。
- 四. 問題を読むときに、声を出してはいけません。
- 五. 問題内容についての質問は受けません。
- 六. 印刷が読みにくいときは手をあげて監督者を呼びなさい。
- 七. 「やめ」の合図があったら解答用紙をおもて向け、問題用紙を解答用紙の上に置いて、回収が終わるまで席を離れてはいけません。（問題を持ち帰ることができません）



□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本は、鎖国が解かれ明治の世になって以降、イギリスやドイツなど西欧の科学の成果や作法を積極的に取り入れ、そこから生まれた技術で社会基盤を整備してきました。もちまへの勤勉さを発揮して、一九八〇年代にはアメリカをおびやかすほどの「ものづくり大国」に成長しましたし、二一世紀にはノーベル賞受賞が相次いで、内外ともに認める「科学技術大国」となりました。

これからさらに成熟していくかと思われたこの国が、大きな岐路に立たされ、科学記者としての私にとっても最も強い印象を残した問題があります。二〇一一年の東日本大震災と、それに伴って起きた福島第一 ① 原発の事故です。

(中略)

私たち報道機関の役割は、東京にある ② 東電本店経由で断片的な情報入手し、いったい何が起きているのかを速く、できる限り正しく読者に伝えることでした。新聞、テレビ、ラジオ、通信社、海外のメディアなど何十社もの報道機関が東電本店につめかけ、断続的に開かれる記者会見に貼り付きましました。

そんなさなかでも、① 私たち記者はどこかで、「東電や政府は、事態を小さく、楽観的に伝えるだろう」と疑っていました。

こうした大事故の際、人間は総じてものごとを楽観的に受け止める傾向があります。「正常性バイアス」と呼ばれる現象です。まして、「原発は安全」と唱えて全国に原発を造ってきた当事者たちが、悪い情報を正直に発表するとはとうてい思えませんでした。じつさい、核燃料が溶けて落ちる最悪の事態(灯心溶融)メルトダウン)が起きていたことは、事故の直後から多くの

専門家が指摘していたのに、東電や政府がそのことを認めたのは、実に二ヶ月以上たつてからです。

ともあれ、メルトダウン、水素爆発、火災など、悪夢のような現象が立て続けに起きている間、記者たちは不眠不休で取材に当たりました。取材をし、記事を書き、目の前にある食事をためこみ、激務の合間の一〇分、一五分を睡眠に当てる、その繰り返しです。しかしながら、誰も経験したことのない事態に立ち会っている緊張感から、仲間の誰一人として風邪を引いたり体調を崩したりしませんでした。

三月も下旬になり、少しずつ考える余裕がでてくると、私は複雑な感情におそわれるようになりました。東電や政府に対する怒りはもちろんですが、② 科学者に対する不信感、そして I です。

科学記者になって以来、私は「科学者の応援団」を自任してきました。便利な生活を支える先端技術のほとんどは科学の果実です。しかし、それを生み出した科学者たちが世間から感謝されないことに ③ 憤慨し、私ができることを社会に知らせてあげようと思つて働いてきました。

科学技術文明の恩恵を楽しまただけで、その背景や仕組み、生み出した人のことに関心を払わないのは「文明社会の野蛮人」。そんな人たちに、科学者のすごさ、獨創性、そして貢献について知ってほしいと、さまざまな取材をし、記事にしてみました。

ところが、震災を機に「私が応援団として書いてきたことは、正しかったのだろうか」と思い始めたのです。

原発は、科学・技術の ④ 粋を集めた巨大なシステムです。それが、地震・津波の前にもろくも崩壊しました。

そもそも、原発の耐震性や安全対策は、「この場所なら、最

大でもこのくらいの揺れ、津波の高さを考慮すればよい」という、科学者たちの想定に基づくアドバイスにそって作られていました。

原発に限りません。過去に起きた三陸大津波の教訓を踏まえ、岩手県田老町(現・宮古市)に築かれた巨大な防潮堤は、最先端の地震学の知識を基に「安全」と見なせる高さ、強度で造られました。しかし、「※万里の長城」のあだ名がつくほどの大堤防も、大津波の前では無力でした。

科学者たちの「最大※マグニチュード八程度」という予測に基づき、津波が到達しない場所に建てた建物が避難所に指定されました。地震が来たらここに逃げるといふ訓練が繰り返されました。三月一日には、多くの人がここに避難し、予想を超える大津波に命を奪われました。

科学者は決して、わざと想定を小さく見積もったわけではありません。ですが、想定外のことが起きれば、科学者の責任が問われます。

地震学者たちは、地震の直前予知を目指して研究してきました。巨額の税金が研究に投じられました。A、東日本大震災ほどの大きな地震を予測できた科学者はいなかったのです。今までの研究は何だったのか。そして、私たち記者はそうした「不確かさ」を含む科学の成果を、確定したことのように伝えてきたのではないか。この責任を、誰が取ればいいのか。そんな気持ちにとらわれ、しばらくは専門家と話をしても、すぐに信用することができませんでした。

その気持ちは、私だけではなかったようです。文部科学省が震災の翌月に行った世論調査では、「専門家の話や意見を信じますか」という問いに、「信じられる」「まあまあ信じられる」と答えた人の割合は、震災前の半分以下、四〇・六%にまで減

りました。同時に、伝える側にいる自分についても考えさせられました。

あの大事故を通して科学記者が学んだ最大のことは、「科学はまだまだ未熟なものであり、それを取り扱う人間こそ、未熟な存在である」ということ。そして「II」ということでした。

科学記事の多くは「くであることが分かった」「くを発見した」「くを確かめた」といったニュースです。これからは、たとえば地震予知の技術がそれほど完成していない現状をきちんと書いて、「現段階では予知に頼るより、地震に強い街作りが必要です」と主張することの方が大切かもしれません。

先端的で新しいものほど珍しがられ、歓迎される傾向がありますが、良いことばかりとは限らない。その新しい何かによって、想像もしなかった「③副作用」が生まれ、それに悩まされることだってあります。

「カーボンナノチューブ」という新素材が注目されています。炭素(カーボン)原子が結合しあって、軽くてしなやかで強い素材ができました。重くて硬い金属の代わりにこれを使って物作りができるのか、そんな研究が進んでいます。

しかし最近、このカーボンナノチューブに、健康被害を引き起こす恐れがあることが分かってきました。「ナノ」というのは「一〇億分の一」を示す極小の単位です。これを人間が吸い込むと、肺の細胞の中にまで入り込み、遺伝子を壊してがんなどを引き起こすのではないかと、言われているのです。安全性をいぬいに見きわめた上で、研究を進め、社会に出す必要があります。

暮らしを豊かにし、苦しみを減らす「光」の部分と、光が当たらない「影」の部分。科学・技術は、その両方を併せ持ちます。「光」だけに注目するのではなく、「影」の部分についても、

科学・技術は検証を続けることが必要ですし、社会もまた、そのことに目を配る必要があるといえます。

日本には原発があります。二〇一一年の東日本大震災までは、海岸沿いに五四基の原子炉が建設されていきました。福島第一原発事故で、六基の※廃炉が決まり、さらに全国の原発が一時ストップしました。けれど最近になって、一部の原発では「再び動かして発電を再開しよう」という計画が進んでいます。

大きな地震が起きても、壊れないし津波は来ない。津波が来たとしても、防潮堤を超えてくることはない。もし津波におそわれて停電しても、非常用発電機があるから大丈夫。福島原発事故は、このような「くはずがない」という楽観的な見立てに基づいて用意された事故対策が、結果的に使いものにならなかった例です。

その苦い経験を忘れたように、電力会社は「せっかく原発があるのだから使うべきだ」と主張しています。

この問題は、事故故に発展した福島第一原発の近くに住む人だけでなく、日本で暮らす国民自身の問題でもあるのです。

**B**、電気を利用するのは私たち国民だからです。原子力発電をやめるかどうか。

やめるとしたら、いまある原発を、どのように廃炉にするか。

やめたとしても、大量にある「原発のゴミ」高レベル放射性廃棄物をどこにどうやって保管していくか。

やめなければ、増え続けるこれらの廃棄物を、どうやって処分するか。

原発をやめたことで電力が足りなくなったら、どうするか。

生活が不便になっても我慢するのか、それとも別の発電方法を確立するために電気代が高くなっても許容するか。

少し考えただけでも、たくさんのことを考えながら選択しな

ければならないことが分かるでしょう。

しかも、試験問題と違って、答えは一つではありません。公式にあてはめて「はい、ご名答！」というわけにはいかないから、余計にややこしいのです。まして、そんな問題を出されて「分からないから、お任せします」とは言えない時代が来ているのです。

(元村有希子 『カガク力を強くする!』)

※(文中のことばの意味)

原発 : 原子力発電所。

東電 : 東京電力。

憤慨 : ひどく腹を立てること。

文明社会の野蛮人

: スペイン生まれの思想家、オルテガ・イ・ガセットのことば。科学・技術の成果を自然物のようにとらえ、深く考えずにそれに頼りきった生活を送っている人のことを、皮肉をこめた表現。

粹 : すぐれたもの。

万里の長城 : 中国に存在する大城壁。

マグニチュード : 地震全体としての規模を表す数値。

廃炉 : 原発で使われている原子炉の運転を終了させ、原発を廃止して解体すること。

問1 ———— **A**・**B** にあてはまることばとして、最もふさわしいものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア なぜなら
- イ したがって
- ウ そのうえ
- エ しかしながら

問2 ———— 線①「私たち記者はどこかで、『東電や政府は、事態を小さく、楽観的に伝えるだろう』と疑っていました」とありますが、なぜですか。ふさわしいものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間は重大事故が起きた時に、ものごとを楽観的に受け止める性質を持っているから。
- イ 事故について詳細に説明しても、国民が理解できるとは思えなかったから。
- ウ 国民に余計な心配をかけて、混乱を起こすべきではないと思っっているから。
- エ 原発の安全性を主張して、全国に原発を広めてきた存在だから。
- オ 事故の原因を正確に把握するには、相当な時間がかかると考えたから。

問3 ———— 線②「科学者に対する不信感」とありますが、どういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 科学者が原発の現場で起こっていた事故について、正確に報告しなかったため、科学者の言うことを信用できなくなったということ。
- イ 科学者の災害想定が報告がわざと小さく見積もられたものであると分かり、科学者の言うことを信用できなくなったということ。
- ウ 科学者のアドバイスを研究に基づく災害対策では震災に対応できなかったため、科学者の言うことを信用できなくなったということ。
- エ 科学者が地震の直前予知の研究にばかり巨額の税金を投じていたことが判明し、科学者の言うことを信用できなくなったということ。

問4 ———— **I** にあてはまることばとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自己満足
- イ 自己嫌悪
- ウ 自己肯定
- エ 自己受容

問5

IIにあてはまることばとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 少しでも早く科学を確実なものにしなければならぬ
- イ 科学は不確かなことこそ誠実に伝える必要がある
- ウ 様々な人の意見を聞きながら記事にすべきである
- エ 未熟な人間の言うことを信じてはいけない

問6

線③「副作用」とありますが、どういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 物作りの場面で活用するために作られたカーボンナノチューブが、本来の目的で使用されず、結果として健康被害が引き起こされてしまったこと。
- イ カーボンナノチューブが軽くてしなやかで強いという特徴を持っていて、重くて硬い金属に代わって物作りに使われ始めていること。
- ウ 金属に代わる素材として注目されていたカーボンナノチューブが、人間の体内に入ると、遺伝子を壊してがんなどを引き起こすかもしれないこと。
- エ カーボンナノチューブが健康被害を引き起こす恐れがあることが分かったのに、社会で活用するための研究が進められていること。

問7

線「大きな岐路に立たされ」とありますが、どういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 東日本大震災や福島第一原発の事故をきっかけに安全性の損なわれた科学・技術を、これまでのように無条件に信頼して活用するのか、危険性も認知して活用を考えるのかということ。
- イ 国家として、安全性を保証できなくなった原発という古い科学・技術を使い続けるのか、新しい科学・技術を取り入れて、安全な別の発電方法を生み出す努力をするのかということ。
- ウ 科学者の研究成果を信じて、政府主導で地震など自然災害への対策を行っていくのか、科学者の研究成果とは関係なく、国民一人ひとりが独自に対策を行っていくのかということ。
- エ 科学・技術は常に問題を抱えているが、人々の便利な生活を支えるためには、科学・技術を使った生活を続けるのか、科学・技術には一切頼らない生活をするのかということ。

問8 筆者の主張として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人々の生活をより便利にするために、これまでの科学・技術を修正しながら、新しい科学・技術を生み出していかなければならない。

イ まだまだ不完全で、様々な問題を抱えている科学・技術については、その安全性が確保されるまで安易に用いるべきではない。

ウ 「科学・技術大国」としての日本を追求し続けるためには、多少の危険や負担も許容するのだろうか、一国民として選択しなければならない。

エ 科学・技術には長所と短所があることを認識した上で、活用の方法だけでなく、活用するのかどうかを、社会全体で考えていかなければならない。

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

子供の頃の話のひとつ、させて下さい。

小学校に上がる少し前のことですから、たぶん四つか五つの頃の話です。

当時ぼくらの家族は東京近郊の小さな町に住んでいました。今でこそ栄えて、土日などは若い人たちが賑わう小都市に成長していますが、その頃はまだ田圃と畑と住宅しかない田舎町でした。

ぼくの父はその町で、月刊誌の取次所を営んでいました。よくするに出版社から依頼されて、定期購読者の開拓と本の配達を※生業なりわいにしていたわけです。今のように流通がしっかりして、どんな小さな町にも本屋の一軒や二軒あるといった状況と比べると、ちよつと信じられないような商売です。

それでも当時は、そんな※悠長ゆうちやうな商売でも充分食じゅうぶんつていたのでした。

木造平屋建ての小さな家。その敷地内に建てた物置小屋のよようなプレハブが、父の仕事場でした。毎朝、食事が済むと同時に父はそのプレハブに閉じこもり、あちこちへ電話を掛けまくるのが日課でした。それから色々な種類の伝票を整理して、昼前には外回りへ出掛けるのです。

ホンダのスーパーカブというバイクをご存じでしょうか。膝ひざを隠すように白いペラペラのフードがついていて、荷台の大きなあのビジネスバイクです。当時父の足はこのスーパーカブでした。荷台に大きな木箱をくくりつけ、本を沢山積んで父はいつも走り回っていたのです。

時々、日曜日などにその木箱の中へぼくを乗せて、近所の公園まで連れて行ってくれたのをよく覚えています。そういえばそんな写真も残っています。三歳のぼくがバイクの荷台に乗り、



※みそつ歯を覗かせて笑っている写真です。撮ったのはたぶん父でしょう。

今でも時々思い出すのですが、あのスーパーカブの荷台からの眺めは、素晴らしいものでした。人も、街路樹も、畑も、そして時には車すらも風の中に溶けて、後ろへ流れ去っていく光景。ぼくは目を丸くしてその様子を見送ったものです。特に良く晴れた日などは、光そのものが風の中に溶け込んで、頬を撫でて過ぎる錯覚さえ抱かせました。耳元で鳴っているのは光の粒ではないかと、本気で疑ったほどです。

そして、ぼくの真正面には父の背中がありました。広くて、大きくて、少し汗ばんだ父の背中。そこへ両腕を回すと、ぼくは世界中で一番幸せな男の子であるような気がしました。鼻を押しつけると父の匂いが、耳を押しつけると父の鼓動が直接伝わって来、スーパーカブの振動とあいまってぼくを心底ほっとさせるのです。だから、荷台に乗せてもらう度にいつのまにか眠り込んでしまうのがぼくの常でした。

そんなふうにして幼かったぼくは、光と風の中で父の肌に触れ、匂いを嗅ぎ、鼓動を聞きながら、小さな掌に幸せのかけららしきものを握りしめていたのです。

しかし、変化はある日突然に訪れました。①大人たちにとつては「突然」ではなかったのですが、ぼくにとつてはまさに「青天の霹靂」でした。

ある夏の日の夕方、父は庭で遊んでいるぼくを呼んで、こう言ったのです。

「オートバイに乗りたいかい？」

ぼくは即座に「乗りたい！」と答え、その場で二、三度飛びはねました。しかし父はいつもと違った様子で、少し悲しそうな瞳を返してきたのです。そしてぼくを抱き上げ、スーパーカブの所まで連れて行きながら、

「今日はね、これからオートバイを売りに行くんだよ」  
そう告げました。

「ウリに？」

「うん。オートバイ屋さんへ持って行ってね、置いてくるんだ」

「置いてきてどうするの？」

「お金を貰うんだよ」

「家のオートバイは？」

「明日からよその人が乗るのさ」

父は努めて明るい声で言いました。そしてぼくを荷台へ乗せ、いつものように走り出しました。

事情が分かったのはずいぶん後になってからのことでしたが、当時、父の仕事は下り坂にさしかかっていたのです。定期購読の月刊誌などは流行らなくなり、誰もが本屋へ足を運んで週刊誌を買う時代になりつつあったのでしよう。定期購読の予約が取れなくなり、それまでのお得意も徐々に離れていったようです。だからぼくの家は、子供には分からない程度に少しずつ、少しずつ貧しくなっていたのだと思います。

父はぼくをスーパーカブに乗せ、家の前の真っ直ぐな田舎道をいつもよりゆつくりと走りまわりました。

②「じゃあ明日はオートバイに乗れないの？」

ぼくは荷台の木箱から身を乗り出し、父の耳元へ口を押しつけて言いました。子供心にも何かとても淋しい気持ちにかられていたのです。父は正面を向いたまま、

「そうだな。明日は乗れないな」

「じゃあ、あさっては？」

「あさっても乗れない」

「しあさっては？」

父は塞ぎ込んで、答えるのを止めました。そんな父の背中を見つめている内、ぼくはつまらないことを訊いた自分が恥ずか

しくなりました。だから③もうそれ以上は何も言わずに、周りの景色へ気を遣うことにしたのです。

④けれどスーパーカブからの風景は、いつものようにぼくを魅了しませんでした。何だか不安な気持ちでいっぱいだったのです。スーパーカブはいつもよりぴかぴかで、ワックスの匂いを漂わせていましたが、そんなことまでが不安の材料に思えてくるのでした。

ぼくはしっかりと父の背中にしがみつき、その匂いを嗅ぎ鼓動を聞きました。何だかもう二度とそんなふうにはできなくなるような予感があったのです。田舎道から狭い国道を越え、商店街を走る頃になっても、父は相変わらず黙り込んだままでした。

やがてスーパーカブは最後の短いドライブを終え、小さな自転車屋の前に停まりました。軒先で自転車のチューブを水へ沈めていた老人が顔を上げ、ぼくら親子を※胡散臭そうな目で見つめました。

「さあ降りて」

父はぼくを荷台の木箱から抱き上げて降ろし、その老人の方へ近づいて行きました。ぼくはスーパーカブの荷台のパイプをぎゅっと握りしめ、⑤息を呑んでその様子を眺めました。父は老人のそばへ屈み込むと、二言三言交わし、ぼくとスーパーカブを振り返りました。ぼくはまるで自分が品定めされているかのような錯覚に陥り、怖くて足が震えそうでした。老人は軽うなずいて立ち上がり、ぼくの方へ歩いて来ます。スーパーカブの周りをぐるぐると回り、さっきまで父が乗っていたシートに跨りました。

「四千円だな」

老人はしわがれた声でそう言いました。父はちよつと顔色を変えて駆け寄り、

「それは安い。もうちよつと※色をつけて……」

「色はつかねえなあ」

「しかし……」

「幾らで売りたいだね」

「せめて六千……五百」

老人は足元へ唾を吐いてスーパーカブから降り、元いた自転車のチューブの所へ引き返しました。⑤その後をまた父は追って行き、そばへしゃがみ込んで何か話しかけます。ぼくは何だかいたたまれない気持ちになって、視線を逸らし、スーパーカブの※スポークを数えたりしました。

一本。二本。三本……。

その数が十本になった時に振り向くと、ちよつと父と老人が店の中へ入って行くところでした。ぼくは胸がどきどきして、今にも泣き出しそうになりました。⑥夕方で、あたりには買い物帰りの主婦たちが沢山行き交っていました。が、ぼくは本当に独りぼつちで立ちつくしている気分だったので。

やがて父が自転車屋の軒先に姿を現すまで、ぼくは苦勞して⑦嗚咽を堪えなければなりません。父は、ぼくが※べそを掻きかけているのに気づくと、足早に近づいて来、

「さあ行こう行こう」

とぼくの手を取りました。ぼくらはもう乗ることのできないスーパーカブの横を抜け、とぼとぼ歩き始めました。角をひとつ曲がりふたつ曲がり。国道まで戻った所で父はポケットから皺くちゃの五百円札を取り出すと、それをぼくに握らせました。「おまえが可愛いから五百円高く売れたよ。だからこれはおまえのものだ」

ぼくはその意味が分からず、ただじつと父の顔を見つめました。父は照れ臭そうに笑いながらぼくを抱き上げ、

「どれ、おんぶしてやろう」

そう言いました。ぼくはされるがまま父に背負われ、国道を渡

りました。

「重くなつたなあ、おまえは」

うれしそうに咳く父の声を聞いたとたん、⑦ ぼくは不意に声を放つて泣き出しました。父はあわててぼくを揺すり、尻を軽く叩いてあやししながら、

「ほら男の子が泣いたらおかしいおかしい」

歌うように呟きました。

けれど、ぼくが泣いたのは、悲しいからではありませんでした。スーパーカブに乗っていた時と同じ父の背中。匂いも、鼓動も同じ父の背中……ぼくの小さな掌の中に握りしめた幸せのかけららしきものが、相変わらずそこにあるのを知ってうれしかったのです。ぼくはあの時、間違いなくその小さなかけらのために泣いたのでした。

(『黄色いドウカと彼女の手』所収)

原田宗典 「パパ、ドント クライ」

※(文中のことばの意味)

近郊 … 都市や町に近いところ。

生業 … くらしを立てるための仕事。

悠長 … のんびりしている。

みそっ歯 … 欠けて黒くなつた歯。

胡散臭そうな … どことなく疑わしそうな。

色をつけて … おまけをしたり、割り増ししたりして。

スポーク … 車輪の軸と輪とを放射状につなぐ細い棒。

べそを掻きかけて … 今にも泣き出しそうに。

問1

~~~~線①②③のことばについて、文中における意味として最もふさわしいものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

① 青天の霹靂

ア 重大なあやまち

イ 不思議な出来事

ウ 苦い思い出

エ 思いがけない異変

② 息を呑んで

ア ひっそりかくれて

イ ほっとして

ウ 恐れて

エ 悩み苦しんで

③ 嗚咽

ア すすり泣くこと

イ 吐き気をもよおすこと

ウ さげぶこと

エ さびしいと思うこと

問2

——線①「大人たちにとっては「突然」ではなかったのでしょうが」とありますが、変化の訪れが「突然」ではなかった様子がわかる段落を文中からぬき出し、はじめの五字で答えなさい。

問3

——線②「じゃあ明日はオートバイに乗れないの？」とありますが、このときの「ぼく」はどのような気持ちですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 父が大切にしているオートバイを売ってしまう理由がどうしても理解できずにいて、そんな父を問いただそうとしている。

イ オートバイを売ることが何を意味するかは分かっているが、悪いことが起こり始めていることは感じて心細くなっている。

ウ 父の仕事がうまく行かず家が貧しくなっていることを思い知らされているが、厳しい現実を受け入れることをかたくなにこぼんでいる。

エ 家が貧しくなっていることがどうしても理解できずにいて、オートバイを売ることがなんとかやめさせようとしている。

問4

——線③「もうそれ以上は何も言わずに、周りの景色へ気を遣<sup>や</sup>ることにしたのです」とありますが、「ぼく」はなぜそうしたのですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 家計の厳しさを知って生じた不安をまぎらわしたかったから。

イ たてつづけに質問をして父を困らせてしまったことで気まづくなったから。

ウ 家計の厳しさは子どもには理解できないこととあきらめたから。

エ オートバイを売るのはやめてほしいという意思を態度で示そうとしたから。

問5

——線④「けれどスーパーカブからの風景は、いつものようにぼくを魅了<sup>みりょう</sup>しませんでした」とありますが、「ぼくを魅了」する「スーパーカブからの風景」とはどのようなものですか。文中から一文でぬき出し、はじめの五字で答えなさい。句読点なども字数に数えます。

問6

——線⑤「その後をまた父は追って行き、そばへしゃがみ込んで何事か話しかけます」とありますが、このときの「ぼく」はどのような気持ちですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 父の真剣な態度から、家が貧しくなっていることが思い知らされて、将来に対して投げやりな気持ちになっている。
- イ 家族のために一生懸命になっている父を助けたいが、何もできず、自分の無力感に打ちひしがれている。
- ウ 父に冷たい態度をとる老人に対し、憤りを感じたが、オートバイを高く売るために、懸命に気持ちをおさえている。
- エ 父の弱々しい様子を見て、幸福な生活が終わろうとしていることを感じ、ひどく不安になっている。

問7

——線⑥「夕方で、あたりには買い物帰りの主婦たちが沢山行き交っていました」とありますが、この一文はどのような効果を表していますか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「独りぼっち」でいる「ぼく」と対比させることで、父がそばにいない孤独感による不安の高まりが表現されている。
- イ 活気のある街の様子を描くことで、時代の流れの中にぼつんと取り残されてしまった「ぼく」のみじめさを浮き彫りにしている。
- ウ 急ぎ足に通り過ぎる主婦たちを描くことで、母親のいる家に早く帰りたいと感じている「ぼく」の気持ちを示している。
- エ 「ぼく」のさみしさとは全く無関係に行き交う人々を描くことで、時代の変化による世間の厳しさや冷たさが強調されている。

問8

——線⑦「ぼくは不意に声を放って泣き出しました」とありますが、なぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア いつもと同じ父の背中に身をゆだねていたら、オートバイを失ったさびしさが痛切に感じられてきたから。
- イ 父の優しい言葉が胸に染みてきて、幸福感で心がいっぱいになったから。
- ウ 父の背中に揺られているうちに、今までと変わらない幸せが続いていることが感じられて安心したから。
- エ 父が自転車屋の老人に冷たくされた悔しさが、一気に込み上げてきたから。

問9

この文章の内容に合うものとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 仕事熱心な父親を尊敬し自分を世界一幸せな男の子だと感じていた「ぼく」は、仕事がうまくいかずオートバイを手放さざるを得なくなっても、以前と変わらないままに父親のことを愛し続けている。
- イ 父親の運転するオートバイからの眺めに魅了され幸せを感じていた「ぼく」は、家庭の事情でオートバイから離れざるを得なくなってしまうが、それによってむしろ父親との絆が深くなり改めて幸せを感じている。
- ウ オートバイに父親のたくましさを重ね合わせていた「ぼく」は、オートバイを売る弱々しい父親の姿に寂しさを隠すことができなかったが、大切なものを失ってなお優しさを失わない父親に再び信頼を寄せている。
- エ 仕事に順調に進んでいた頃の父親からかわいがられていた幼い「ぼく」は、オートバイを売る父に子供じみた振る舞いをしてしまい恥ずかしく感じていたが、父親の思いやりによって自身の成長を実感している。

【三】 次の慣用句について、正しい表現のものを選り、記号で答えなさい。

- ① ア 顔をうかがう  
イ 顔をうかがう
- ② ア 類は友を呼ぶ  
イ 友は類を呼ぶ
- ③ ア 口車を合わせる  
イ 口裏を合わせる
- ④ ア 歯にころもを着せぬ発言  
イ 歯にきぬ着せぬ発言
- ⑤ ア あと髪がみを引かれる思い  
イ うしろ髪を引かれる思い

【四】 次の――線のカタカナは漢字に直し、漢字は読みを答えなさい。

- ① 恋愛小説よりもスイリ小説が好きだ。
- ② コウソウビルに入った会社に勤める。
- ③ 光が水面にハンシヤする。
- ④ ジョウキ機関車に乗って旅をする。
- ⑤ 先週の北陸地方は記録的なコウセツ量となった。
- ⑥ 上司の指示に従う。
- ⑦ 行事が終わって感傷にひたる。
- ⑧ 結婚式で純白のドレスを着る。
- ⑨ 洗練された技術に驚く。
- ⑩ 恐竜の化石を展示する。

これで問題は終わりです。